

親の墓に葬られた。その歿後一五〇年に当たり、第九九回日本医史学会が函館で開催されるのを機に碑を建立してその功績をたたえる。

一九九八年(平成十)五月十六日

松前町

日本医史学会

弘前大学医学部麻酔科同門会

沖縄医学生教習所碑再建について

新垣 敏雄

平成十一年七月十四日沖縄県医師会は、『沖縄医学生教習所記念碑』の再建を完了した。琉球史を概観しながら、同教習所の足跡と再建について報告する。

琉球に関する記述が中国の記録で最初に現われるのは、『隋書』の流求国伝である。隋の大業三年(六〇七)煬帝が朱寛を「流求」に派遣し、流求人を探えて帰ったとされている。

「琉球」の字があてられたのは一四世紀以降であり、明の洪武帝が、琉球の中山王「察度」に与えた銀印に刻まれた後、定着した。

伝説時代からようやく実在の人物が、琉球史に登場するのは一二世紀の末頃である。その頃、琉球に三山時代があり、中山王、南山王、北山王と称して三山抗争をしていた。

一三七二年(明・洪武五)明の楊載が琉球に派遣され、明に入貢することをすすめた。

これを受けて、中山王であった察度は、弟の泰期を遣わして入貢した。中国を宗主国とする献上と下賜の関係であり、冊封体制のはじまりである。

中琉両国の貿易は、貢物を献上し、何倍もの価値のある物品を下賜される朝貢貿易であった。

中山に続いて南山(一三八〇年)、北山(一三八三年)も入貢した。

一三九二年、明の太祖(洪武帝)は「閩人(福建人)の善く舟を操る者三十六姓」を下賜された。そして北京の国子監にはじめて留学生(官生)が派遣された。下賜された「閩人」は、琉球の久米村に集団で生活し、水先案内人、舟大工、通訳、政治顧問として琉球王府に貢献した。

明からは、三山の抗争をやめるように言われていたが、一四二九年尚巴志によって三山統一が完成し、中山王となり首里の地に王府を築いた。

医療については、民間療法や経験的医療だけであり、一六〇九年薩摩の侵攻以後は、薩摩から医者を招いて人民の医療に当らせたとされている。

一五三四年冊封使として来琉した陳侃は『使琉球録』に、

「医薬はないが、民は若死することはない」と書いてある。

一五八九年(天正一七)越前(福井県)出身で、山崎守三という医師が琉球に来て帰化し、医療を行った。彼は、琉球は中国との往来が盛んだし、漢方の名医がいるはずだから師事したいと琉球に来たが、期待を裏切られ嘆いたそうである。

一六三七年になって、琉球王府も漢方医養成の必要性を痛感し、一三九二年の留学生派遣から約二四〇年遅れて、日本及び中国に毎年医学留学生を派遣する制度を作った。

一六三八年波名城政由が、王府の命ではじめて北京へ医学留学している。日本留学は専ら薩摩に限られ、中国留学は主に福州か北京であった。

薩摩藩の侵攻後は長い間その支配下に置かれた時代で、中国と日本の両文化の影響をうけながら、医療の面でも著しく発展した時代であった。一六八九年には、高嶺徳明が王の世孫である尚益の他、五名の児童に対して、全身麻酔のもと補唇術を成功させ、一六九〇年に薩摩の藩医伊佐敷道与に伝授している。一八四八年、仲地紀仁により「牛痘法」が実施され西洋医療が行われたが、それ以外は漢方医による医療が広く普及していた。

明治維新により、江戸時代から長く続いてきた伝統的な漢方医学から西洋医学へと移行するようになった。

明治政府となり、琉球では一八六六年尚泰王を冊封するための冊封使が乗った「御冠船」が最後の冊封船であった。

琉球からは、一八七四年(明治七)に渡閩した船が最後の進

貢船となった。

一八七二年(明治五)明治政府は、琉球王国を廃して「琉球藩」とする。

一八七九年(明治一二)には、琉球藩を廃し、沖縄県とする。これが、いわゆる廃藩置県(すなわち琉球処分)である。

このように、五〇〇年余にわたる中国との「宗属関係」「親



図 1

表1 医生教習所卒業者名簿 (172名)

第1期卒業生	明治23年(1890)	伊波孫兵衛	上原 尚志
又吉 昌徳	崎濱 常恵 我謝 秀色	第13期卒業生	明治35年(1902)
金城 徳持	鉢嶺 清懐 照屋 全道	渡口 精鴻	仲尾次景榮 與義 清隆
新城 新	我如古樂一郎 仲吉 朝端	當間 嘉源	勝連 盛常 宜保 成晴
第2期卒業生	明治24年(1891)	知念誠太郎	
慶田城永清	仲尾次政均 山城 正心	第14期卒業生	明治36年(1903)
新垣 居信	饒平名紀順 比嘉 正俊	山口 重徳	平田 嗣順 大濱 當源
屋部 憲暢	照屋 孚彰 宮里 清孝	国吉 眞善	村田 精成 島袋 利佐
第3期卒業生	明治25年(1892)	宮城 松青	牧志 正一 笠茂 掃部
宜野座朝昆	饒平名紀懐 永野 芳齋	久場 守信	山城 秀正 清水 清孝
又吉 昌祥		中村 茂一	山城 文三 齋藤慶四郎
第4期卒業生	明治26年(1893)	第15期卒業生	明治37年(1904)
新垣 安診	當間 重禄 前田 次吉	平良 正	桑江 朝紀 比嘉 祐水
第5期卒業生	明治27年(1894)	土持 綱利	仲本 正俊 友寄 隆晃
新垣 宣榮		許田 重睦	
第6期卒業生	明治28年(1895)	第16期卒業生	明治38年(1905)
新垣 舜業	金城 紀綱 喜瀬 乗功	平林 萬吉	太田 隆静 大城 盛昌
山里 朝意		高良 慎正	當間 恵福 宮城 幹和
第7期卒業生	明治29年(1896)	第17期卒業生	明治39年(1906)
玉城 盛松	外間 樽	喜瀬 眞正	堀川 良英 新里 仁榮
第8期卒業生	明治30年(1897)	第18期卒業生	明治40年(1907)
平良 眞順	福永 兼保 譜久村正恭	上江洲智綸	山里 將喜 名嘉眞武光
照屋 孚詮	田原 秀三 長濱 眞知	大城 亀助	眞境名安明 大嶺 信
山田 萬吉		神元 繁種	山里 將教 新城 吉太
第9期卒業生	明治31年(1898)	大田 朝親	我喜屋盛清 国吉 朝宗
翁長 武静	渡口 三郎 與那嶺三郎	山入端松正	
崎濱 秀芝	屋我 良行	第19期卒業生	明治41年(1908)
第10期卒業生	明治32年(1899)	金城 良榮	宮里 良徳 稻福 全成
古堅 宗煥	富永 實忠 照屋清五郎	大濱 善保	垣花 昌林 牧志 宗得
新垣 善治	山城 朝祥 宮城 源信	牧志 正敏	比嘉 賀善 友寄 英傑
平野 安陽	宮城 普喜 伊江 朝貞	國場 明之	石嶺 博正 大濱 孫昌
比屋根良任	永野 萬吉	嘉手川詠南	我喜屋宗亀 當山 昌隆
第11期卒業生	明治33年(1900)	第20期卒業生	明治42年(1909)
名嘉原知晨	上間 徳次 花城 永能	田崎 朝盛	仲里 朝貞 親泊 康順
與儀 達孝	渡嘉敷唯敷 吉田 安盛	上與那原朝珍	
島袋 常精	大城幸之一 仲本 將佐	第21期卒業生	明治43年(1910)
金城 清松	大城 幸太 森田 孟立	宮里 全盛	佐久本嗣恭
林 清重	宮城 條仁 山城 興忠	第22期卒業生	明治44年(1911)
富川 盛淳	福山 精三 向井 文忠	砂川 清	久田 友雄 玉城 三郎
伊禮 正次	山城 健男	脇田 元三	仲地 紀晃 野村 政尚
第12期卒業生	明治34年(1901)	第23期卒業生	明治45年(1912)
西尾直太郎	新城半次郎 嘉手納清行	大見謝恒吉	比嘉 良則 島袋 全信
池原 銀蔵	銘苅正太郎 東恩納寛静	濱松 哲雄	久田 友博 知念 政秀
宮里 加那	新崎 康舒 富原 守昭	仲嵩 嘉尚	南風原朝保

子・君臣」の関係を一方的に断たれた琉球は、政治の混乱と共に支配属(土族)の没落や失業または、物価の高騰などが県民の生活を直撃し、一般住民は苦しい貧困生活を強いられるようになった。当然、医療界にも混乱をもたらした。

明治八年(二八七五)那覇に内務省出張所が設置され、所長に陸軍分遣隊医官が委嘱されて住民に西洋医学を施した。當時は、病人が多く地元の医師(漢方医)が少なかったため、多忙を極めたとのことである。

醫生教習所記念之碑

明治十八年二月沖繩縣醫院ニ醫學講習所ヲ新設ス。蓋置縣後日向淺ク縣民ノ衛生思想未タ幼稚ノ域ヲ脱セス寒村僻地ニ至ツテハ殆ト醫樂ノ仁澤ニ浴セサルヲ以テ汎ク子弟ヲ教養シ之ヲ賑恤救護スルノ必要ヲ認メタレハナリ。

是年六月校舍ヲ下天妃ニ移シ同二十二年醫生教習所ト改稱シ同三十四年地ヲ松下町ニトシテ病院及教習所ヲ新築シ大ニ其規模ヲ擴張セシカ同四十五年醫術開業試験法改正ノ結果閉鎖セラレ、ニ至レリ。創立ヨリ是ニ至ル歳ヲ閱スルコト二十八年卒業回数ヲ重ナルコト二十三次に籍生徒約五百名開業免許狀ヲ受クル者實ニ約二百名ニ上レリ。

惟フニ本教習所ノ開設ハ恰モ縣治草創ノ時ニ際シ人心ノ傾向官場ノ吏僚ヲ貴ンテ民間ノ業務ヲ喜ハサル風アリ從ツテ世人ノ本教習所ヲ視ルコト甚タ重カラス是以諸生ノ來リ學フ者自ラ褒貶ノ外ニ立チ螢雪三十年孜々トシテ養性ノ學術ヲ研鑽シ營々トシテ方藥ノ天職ニ没頭セリ。夫レ大政維新ノ皇化遠ク南陲ニ迫ンテ悉ク舊來ノ陋習ヲ破リ開明今日ノ盛ヲ效スモノ本教習所ノ微力亦與ラストセンヤ。況ヤ本所出身者中本職ノ餘力ヲ以テ或ハ政治界ニ或ハ經濟界ニ縣治ノ發展縣民ノ向上ニ貢獻セシ者多士洵ニ儕々タルヲヤ。

顧レハ滄桑幾變遷同窓ノ士ニシテ既ニ鬼籍ニ入りシ者約五十名母孺ノ遺址亦草莽ノ裡ニ埋没セントセリ。乃チ同人胥謀リ之ヲ金石ニ録シテ以テ後昆ニ貽サントス。波上ノ清風永ク其芳ヲ傳ヘ筭崖ノ潮音長ヘニ其功ヲ頌ヘヨ。

昭和三年十一月十日

文學士 東恩納 寛惇撰

おける医師養成の対策が急務であった。

明治一八年(一八八五)、早急に医師を養成すべく、沖縄県

医院内に「附属医生講習所」を創設した(図1)。

明治三二年(一八九九)には、沖縄県医院を沖縄県立病院と改称し、これと同時に医生講習所も「附属医生講習所」と改称され、例外として存続が許された。

修業年限は四ヶ年制で、明治三三年(一八九〇)に第一期生九人を卒業させ、医師国家試験合格者は四人であった。

医生教育所への応募条件に、学業成績が優秀でありながら、家庭が貧困のため、師範学校や中学校へ進学できない子弟と

醫 生 教 習 所 記 念 碑

明治十八年二月沖縄縣醫院醫學講習所新設、蓋置縣後日向淺く縣民ノ衛生思想未々幼稚ノ域ヲ脱スル寒村瘴地ニ至リテハ殆ト醫學ヲ仁澤ニ浴セサルヨリテ汎々子弟ヲ教養シ之ヲ賑恤救護スルノ必要ヲ認メテハナリ、是年六月秋會ニ下天紀ニ移シ同二十二年醫生教育所改稱シ同二十四年地ヲ松ノ下町ニシテ病院及講習所ヲ新築シ大ニ規模ヲ擴張シ女同四十五年醫術開業試験法改正ノ結果開領セラルニ至リ、創立ノ是ニ至リ歲ヲ閱ヘルニト二十八年卒業回數ヲ重クシテト二十三次在籍生徒約五百名開業免許狀ヲ受ケル者實ニ約二百名ニ上リ

惟ニ本教育所ノ開設ハ恰モ縣治草創ノ時ニ際シ人心ノ傾向官場ノ吏僚ヲ貴シテ民間ノ業餘ヲ卑ハサル風アリ從ツテ世人ノ本教育所ヲ視ルニ甚々重ク多ク是以諸生未リ學ヲ習フ者自ラ後取ノ外ニ立テ當堂三十年孜孜トシ養性學術ヲ研鑽シ管管シテ至華天職ニ没頭シテ夫レ大政維新ノ皇化遠ク南陲ニ迄テ悉ク播來ノ陋習ヲ破リ開明今日ノ感ヲ致スニ本教育所ノ微力亦與ラストセンヤ、況ヤ本所出身者中本職ノ餘力ヲ以テ或ハ政治界ノ或ハ經濟界ニ縣治ヲ發展縣民ノ向上ニ貢獻セシ者多ク洵ニ僑儕タルヤ

願フハ滄海桑田運同運ノ士ニシテ既ニ鬼籍ニ入りシ者約五十名母學ノ遺址亦草莽ノ裡ニ埋没セリトセリ、乃チ同人齊誦之ヲ金石ニ録シテ以テ後昆ニ貽サントス、波上清嵐永シ其芳ヲ傳葉崖ヲ潮音長シ其功ヲ頌ヘヨ

昭和三三年季秋 登程 大禮舉行日 文學士 東恩納寛博撰 醫師 山城正心書

図3 再建記念碑の拓本。採拓：崎間麗進

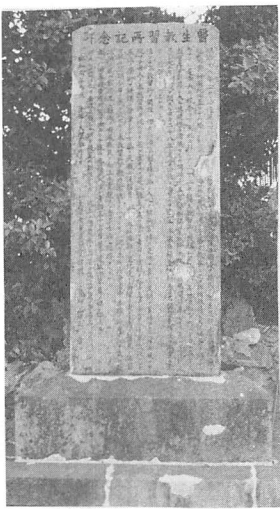


図4 旧記念碑

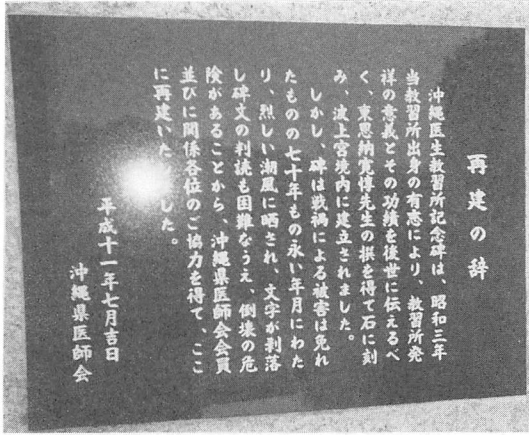


図 5

なっていた。中には人力車夫などの副業をしながら通学した人もいたそうである。

殆んどが貧しい家庭や地方の出身者であり、国家試験に合格するには筆舌に尽くせない程の努力が必要であり、合格して医師になった人は、努力家で勉強家、積極的な性格の持ち主の人達であった。当時、長崎や名古屋へ国家試験を受けに行くにも、船旅や宿泊費と相当の費用と日時を費やしたようである。

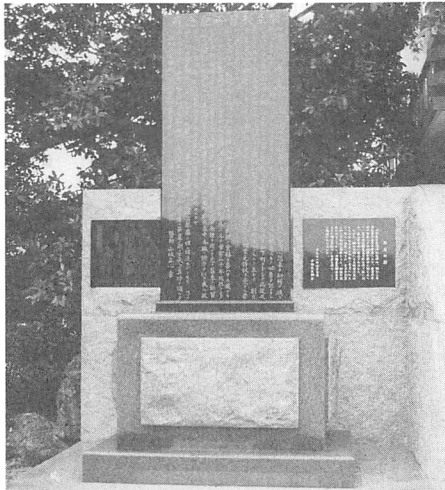


図 6 新記念碑

明治四五年閉校するまでの二八年間の存立期間に、在學生五六五名、二三次卒業生を送り出し、そのうち一七二名が医術開業試験に合格して医師免許を得た。医師になれたのは三分の一以下という厳しい結果であった(表1)。

免許を得た医師達はその後、沖繩の医療を担ったばかりでなく、政治、行政、教育、経済界とリーダー役を果し、地域の発展につくして大活躍をした。沖繩の医療界にとって大きな黎明期であった。

明治政府は、三四年に医学専門学校令、三六年に私立医学専門学校令、三八年に私立医学専門学校指定規則等を出し、明治三九年、医師法を發布して『医術開業試験規則』改正が



図7 波上宮、中央が新石碑

行われた。
 医師試験の受験資格は、医学専門学校の卒業生でなければならなくなった。

順天堂大学の酒井シツ教授は「沖縄医学生教習所が専門学校

にならない限り、明治四五年に入學した学生は医術開業試験を受験できない。そこで沖縄医学生教習所は廃校する以外に道がなかったのである」と、同教習所廃校の大きな理由であるとされている。

昭和三年(一九二八)になって、医学講習所及び医学生教習所の出身者の有志により、教習所発祥の意義を後世に伝えるべく、記念碑の建立と記念誌の発刊が行われた。

碑文は、文学士で歴史家の東恩納寛博先生が執筆し、同教習所出身の山城正心先生が揮毫した(図2・3)。石に刻まれた記念碑は、那覇の波上宮境内に建立された。

しかし、石碑は七〇年もの永い歳月にわたり、潮風と塩害に晒され、また沖縄戦での損傷もあって、弾痕や亀裂、刻字の欠落や漂白を生じ、碑文の判読も困難な状況となり、部分補修はされていたが、倒壊の危険も出てきた(図4)。

教習所出身者のご子弟であられる長田紀春先生が、実状を報告し、再建を要望された。

那覇市医師会と沖縄県医師会が協力して、再建委員会を設け、五〇二名の多数の方々から浄財の寄付が集まり、平成一年旧石碑の跡に見事に再建された(図5・6)。

再建委員長の長田紀春先生のお言葉をかりれば、碑の建造を担当した「沖縄関ヶ原石材」の「新技術を駆使して碑の正確さ、静謐さ、堅牢さを残すと共に、一般の方々にも親しみ易い様に工夫されている」と述べられている(図7)。なお旧碑については、沖縄県芸能史研究会々長の崎間麗進先生のお

力添えて県立博物館に保存してもらった。新旧の石碑が沖縄の医療史の足跡を刻むと共に、後進の者の道しるべ・励みになることを願っている。

※ 表1・図2・図3の資料は「沖縄医史教育所碑再建記念誌」より転載させていただきました。

例会抄録

検梅医・松山不苦庵の足跡

中西 淳 朗

演者は平成三年一月の例会において、『横浜医学史細見』と題して、基本的な課題であるのに研究されていない問題について述べた。

その中で、松山不苦庵について述べたが、非常に不十分であった(日本医史学雑誌第三七巻三号二一九頁)ので、今回その後の研究成果について発表した。

一、不苦庵とよく混同される松山棟庵の略歴については、明治六年の自筆履歴書によるのが最も正確であるが、この写真が『図説・慶応義塾百年小史』に収載されていると云うものの、この本は一般的でないので今回、神谷昭典著『日本近

代医学の定立』と『慶応義塾百年史・上巻』を必読文献に加えた。

一、不苦庵が提出したと考えられる経歴書(「神奈川県史料・第八巻」)を改めて通覧すると、彼の旧所属は館林藩となっており『横浜軍陣病院の日記』等に記されている前橋藩ではない点が疑点を生む。そして最近まで読み落していた項に、彼のまたの名が藤原義定であることがあげられる。

そこで館林市図書館に「松山氏という藩医」の調査を依頼したが、松山氏は足軽に一名を数えるのみだとの返答をうけた。

一、松山不苦庵の経歴に補足すべき点があるのではないかと、再調査したところ新たに次の三点を発見した。

イ、実地試験合格の件、『横浜市史・資料編二十』任免報告類第七条に、左記の如き「海軍医官の証書」が収載されていた。

「拙者共今日病院ニ於テ医術試ノタメ病婦ヲ検査為致候処
医師ニウトン(Newton)氏留守中代勤トシテ松山不苦庵適當
致候此段証明致候以上

千八百七年第十月六日

英海軍医官 ヘンリーハッドウラ

(Henry Hadlow)

合衆国海軍医官助役

セーアールトライオン

この証書につづいて不苦庵の昇進催促状もあり、さらに辞